

リサイクル 中間処理業者の現状

自動販売機横などに設置されるリサイクルボックスから回収されるPETボトル。その後、どのようにリサイクルされるかを知る人はまだまだ少ない。日本食糧新聞は、回収後に集積される中間処理業者の現場を数日間にわたり取材。高温多湿の建屋で働く人々の姿、消費者のリサイクルへのモラルなど社会のさまざまな側面が見えてきた。(渡辺正大)

手作業頼りから機械化の流れ

自動販売機横に設置されたリサイクルボックスから回収されたPETボトルやアルミ缶などを仕分けして、リサイクルに回すための作業を進める中間処理業者の中には、人の手を使うのは最低限にとどめ、機械化を進めようとする動きを取る企業も現れ始めている。成田空港近くの工業団地に日本最大規模の中間処理施設を持つ「ガラスリソーシング」(本社=千葉県銚子市)成田工場がその

一つだ。同社の伊藤孝展副社長によると、機械化を進め始めたのは2018年のこと。イタリア、フランス、ドイツ、スロバキアで選別機が稼働している様子を目の当たりにした。「人がほとんどいない工場に驚いた。自社でも取り入れていきたいという思いが強くなった」と当時を振り返る。そもそも同社でも人の手を使った作業が主流だった。多い時には、作業には40人近く



回収したPETボトルはほぼ1年中この場所に集められる(ガラスリソーシング成田工場)



機械化が進み従業員の数も以前に比べ少なくなった(彩源=埼玉県深谷市)

が当たっていたこともあった。ヘルメット、長袖、安全靴や長靴を身にかけて作業をする。夏場は、タオルを首に巻きつけて、扇風機を当てながら黙々とベルトコンベヤーから流れ出てくるものを仕分けする。タバコ、雑誌、紙おむつ、電池、ライター、ありとあらゆるものがある。中に

は触りたくないものもあるが「仕事だと割り切っている」と淡々と伊藤副社長は話す。内側に軍手、外側にゴム手袋を付けていてもガラスが刺さり、時にけがをすることもあったという。作業は午前8時から午後5時まで。一番早いトラックは、午前6時30分ごろから、回収してきたPETボトルなどを運んでくる。回収エリアは、東京都、千葉県、茨城県、栃木県、埼玉県、福島県の1都5県にまたがる。1日当たりの処理量は2600t、これは日

本最大規模にのぼる。毎年、機械を更新することで、人への負担をいかに軽減できるかを模索している。豊敷の休憩所にエアコン、TVなどを設置することで、休憩時にリラックスできるように細部にまで働きやすさを追求していくことを今後進めていく方針だ。同社が力を入れているのが災害時の対応だ。19年に発生した台風で、4日間の停電を経験した。そのため、普段からやりとりのある同業他社から人を借りて作業をしたこともあった。そのため、災害時の対応については「24時間稼働できるように発電機を設置した。いざとなれば、同業他社の分もお手伝いが可能な状態になっている」(伊藤副社長)。会社は、大晦日から正月三日以外は、休みなく稼働している。「作業が止まると、困る人がいる。ごみについて減らせるところまで、減らしていけるかを追求していきたい」と伊藤副社長は話す。同社の挑戦はまだまた先を見据えているようだ。一方、埼玉県深谷市

に本社を持つ「彩源」でも機械化を進めている。以前は、30人近くいた従業員は、今では8人ほどで作業にあたる。AIによる選別機などを使い月間1000t近くの処理を可能にし、年間でも約1万3000t近くのPETボトルなどの選別などをしている。武笠行男社長は「無理をさせない働かせ方が必要」と言い、「暑い時期には、少しでも体調不良が見られれば、休ませるようにしている」と従業員の健康管理について注視している話